

## アンデスの物流を支えたアリエーロの活動と社会的・宗教的意味づけ

上原なつき (名桜大学)

キー・ワード： 山岳信仰、他界、コスモロジー、周縁的人物、経済的均衡

### Actividades comerciales de Arriero en los Andes y sus significados sociales y religiosos

NATSUKI UEHARA (Meio University)

Keywords: *culto a las montañas, el otro mundo, cosmología, persona marginal, equilibrio económico*

#### 1. はじめに

アプリマック県アンタバンバでは、「死者の日」やクリスマスの祭りにおいて、重要な役どころとしてアリエーロ (arriero) が登場する。アリエーロとは、馬やラバなどの荷役獣を用いて物品運搬や交易を行う人物のことである。道路が整備されトラックやバスによる物流が確立した現在、アンタバンバではアリエーロを生業とする人はほぼいなくなった。

アンタバンバのアリエーロに関する先行研究が管見では今のところ見つけられていないため、本発表では、まず、その他地域のアリエーロに関する先行研究をまとめることで、アリエーロの交易活動の経済的側面を概観した。次に、アンタバンバの祭りにおいて、なぜアリエーロが重要な役どころとして登場するのか、その社会的・宗教的役割をアヤクーチョ県のアリエーロと山に関する説話から考察した。

#### 2. スペインのアリエーロ

アリエーロの習俗は植民地期にスペインからアンデスにもたらされたと考えられるが、スペインにおけるアリエーロの起源は不明である。エストレマドゥーラ県ではかつて、毎年農閑期に農牧民が2~6か月間程度、アリエーロとして働いた(Calero y Carmona 2011, p. 157)。他国では物珍しい品とされた当該地の焼き物や、保冷効果のある土器のボトルを販売した。マドリッド、パリ、ストックホルム、ベルリン、コンスタンティノーブル、ラトビア、ベネツィアなどまでアリエーロは旅をし、交易を行った。遠方のほうがより高値で売れ、電気冷蔵庫が普及する頃まで交易は続いたという [Calero y Carmona 2011:156-

165]。

つまり、アリエーロとは運搬業や単なる馬引きではなく、交易人的要素が強い職業であることが理解できる。

#### 3. コノ・スール地域のアリエーロ

次に、南米のコノ・スール地域のアリエーロについて見ていく。当該地のアリエーロはアンデス山脈を越えて、大西洋と太平洋を結ぶ物流網・交易網を支える重要な役割を果たした。蒸気船が当該地域の物流を担うようになる19世紀末までのおよそ300年間、アリエーロが物流と交易の要であった。

また、ブエノスアイレスからクスコまでという広い範囲で活動したため運搬料も高く、パンパで育てた家畜を各地で販売・賃貸するなど、当該地域のアリエーロは高い収益を上げていた [Lacoste 2008:35-36]。

#### 4. アンタバンバのアリエーロ

主な交易ルートはチャルワンカ、アバンカイ、クスコ、キリヤバンバ、セルバのユンカ地方、プキオ、ナスカ、パルパ、イカ、オコニャ谷、マヘス (アレキーパ) などである。数か月かけて旅の準備がなされ、女性たちが商品としてリクリヤやポンチョなどの布製品を織った。アンタバンバでは、アリエーロは少なくとも1960年代頃まで存在したという [Aranibar Chaccara 2008]。

#### 5. 死者の靈魂を導くアリエーロ

アンタバンバで11月1日から2日の「死者の日」に行われる死者儀礼アニメーロ (Animero) では、生前にアリエーロだった人物の頭蓋骨が

使用される。アリエーロの頭蓋骨は帰郷する死者の靈魂を道案内し、また、死者が生者をあの世に道連れにすることを防ぐという。なぜなら、死者の家があるとされるコロプナ山の近くを、アリエーロは交易の旅で行き来するからである。つまり、アリエーロはあの世への旅路を知る人物である [上原 2018]。

## 6. アヤクーチョ県のアリエーロに関する説話

次に、アヤクーチョ県のアリエーロに関する3つの説話を紹介した。説話①「アプ・ワマニとアリエーロ」では、山の神アプ・ワマニとアリエーロの関係性が語られる。アプ・ワマニはアリエーロが勤勉で山への礼儀を怠らない場合は庇護し、自らの所有物である金銀などの富を与える。しかし、礼儀を欠き、利己的態度を取れば人間を動物の姿に変え、死をもたらす [García Miranda 2010:4]。

説話②「アリエーロである雹」では、雹はアリエーロであると語られる。野生動物は雹の荷役獣である。雹が雷鳴を轟かせて畑を叩くと、あらゆる農作物があらわれる。雹にとっては人間もラバであり、時に人間を殺し、魂とその荷物も奪った [García Miranda 2010:5]。

次に、説話③「アリエーロを庇護する死者」についてである。煉獄にある死者の靈魂もアリエーロを庇護する存在である。アリエーロは時に墓地で夜を過ごすことがある。そこで強盗や家畜泥棒にあったとしても、死者の靈魂がアリエーロを庇護し助けてくれる。しかし、墓地の死者の靈魂が庇護するのはよそ者であるアリエーロや旅人だけである。地元の者たちが墓地で寝泊まりすれば、死をもって罰せられる [García Miranda 2010:8-9]。

## 7. まとめ

アリエーロは運搬業や単なる馬引きではなく、交易人である。コノ・スール地域のアリエーロは高い収益を上げ、地方の経済発展に寄与した。しかし、アンタバンバのような山間地の小さな農村では、アリエーロは農民の副業的職業であり、そこまでの収益はなかったであろう。しかし、村

で生産された布製品などの交易により、村では生産できない様々な物品を村に持ち帰ったことから、村の人々の生活を支える重要な役割を担った。

加藤 [1991, 1998] によれば、都市からやってきて村に住む仲買人や白人の農場主はピシュタコと呼ばれ恐れられた。ピシュタコは有益なもの(村人の脂肪)を奪って都市へ売り払い、富を独占する。ピシュタコは村内の経済的均衡を乱す、村の内外を行き来する周縁的人物として危険視された。一方、アリエーロも同様に村の内外を行き来するが、アリエーロの場合は村外から村へ富をもたらす有益な人物として、アンタバンバの祭りでは重要な役どころとして登場する。

また、アヤクーチョの説話では、アリエーロの庇護者である山や雹はアリエーロに富も与えるが、時にその命と積み荷を奪う。人間と山の間の経済的均衡を調整するために、アリエーロの命と積み荷を奪うことで、人間による極端な富の独占を禁止する。つまり、加藤のピシュタコに関する研究では村内の経済的均衡が問題となったが、アリエーロと山の関係では、人間と山の間で経済的均衡を保つ必要性が示されている。

## 【主要参考文献】

García Mirada, Juan José, 2010, *Arrieros y acémilas en la literatura popular andina, Pacarina del Sur*, 2:1-16.

加藤隆浩、1991、「ピシュタコ:アンデス世界における村落と都市の媒介者」、『伝統宗教と知識』、杉本編、pp.121-148、南山大学人類学研究所。

加藤隆浩、1998、「アンデス高地農民の民間信仰:ピシュタコの社会的意味」、『文化人類学の展開:南アメリカのフィールドから』、大貫良夫・木村秀雄編、pp.119-136、北樹出版。

Lacoste, Pablo, 2008, “El Arriero y el Transporte Terrestre en el Cono Sur (Mendoza, 1780-1800)”, *Revista de Indias*, LXVIII(244):35-68.

上原なつき、2018、「死者儀礼アニメーロの変容と継続:儀礼の再興と中止からフォルクローレ・フェスティバルの演目化まで」、『アンデス・アマゾン研究』1:73-89。